

被災地の復興過程における地域の心的空間秩序の変容に関する研究 —岩手県大槌町におけるワークショップとヒアリング調査結果の分析を通じて—

Study on transformation of system of mental space during reconstruction process in
the devastated area

- Through analysis of results of workshop and interview in Otsuchi town, Iwate prefecture -

○大西健太^{*1}, 安治徹^{*1}, 磯村和樹^{*2}, 槻橋修^{*3}

ONISHI Kenta, ANJI Toru, ISOMURA Kazuki, TSUKIHASHI Osamu

We organized and classified the testimonies at the "Memory Town Workshop" held in Otsuchi town, Kamihei county, Iwate prefecture, and analyzing them, we extracted "a place that is talked about as a memory of an individual's living area and expresses the characteristics of the local space. By proceeding with a bird's-eye view of the entire city, we will show a method for reconstructing the mental and spatial order of the region. In addition, based on the current state of the city obtained through on-site hearing surveys, we will consider the transformation in the living space of Otsuchi Town before and after the earthquake.

キーワード：記憶，場所性，災害復興，ワークショップ

Keywords: Memory, Locality, Disaster Recovery, Workshop

1. はじめに

2011年3月11日に発災した東日本大震災で東日本の太平洋沿岸部の多くの街や集落は甚大なる被害を受けた。津波に飲み込まれ、住居は押し流され、その街の原型をとどめていない地域も少なくない。

筆者らは、震災によって、建物などの街の空間・場所といった物理的な要素だけでなく、人々が持つそれらの空間や場所に関わっている街の記憶のような心的要素もまた、次第に失われていくことに着目した。発災直後より、被災地の震災前の街並みを復元する縮尺 1/500 の模型を制作し、市民との着彩・対話型のワークショップ（以下、WS）を行うことで、岩手・宮城・福島各被災地を対象に被災前の街の記憶を復元する WS を継続的に行ってきた（写真 1）^{注1)}。これらによって得られた模型上には物理的な要素だけでなく心的な要素も付随しており、これらを一体的に捉え「心的空間秩序」と呼ぶこととした。

本研究では、街の中心市街地が甚大な被害を受け、街

の景観が大きく変容した地域であり、一連のプロジェクトの中でも最も早期に行われてきたものの一つである岩手県上閉伊郡大槌町（町方地区・安渡地区）を対象とする。2012年6月、2013年5月、2015年7月に開催したWS^{注2)}で収集された記憶を分析し、記憶をクラスター化・構造化することで、震災前の大槌町の空間構造を明らかにするとともに、現地でのヒアリング調査^{注2)}を通して得られた、復興が進む街の現状をもとに、震災前後における大槌町の「場所」や「空間」の変容について考察を行う。

2. 大槌町について

2-1. 東日本大震災での被害

本研究において対象とした岩手県大槌町は太平洋に面する三陸海岸に位置し、四方を山と海に囲まれた自然豊かな地域である。大槌湾に面する大槌漁港を中心とした漁業を軸に発展してきた港町であり、城山を囲う様に流れる大槌川と小槌川の河口部周辺の沖積平野部が町方地区と呼ばれる街の中心として発展し、住宅街と役場、学校、

*1 神戸大学大学院工学研究科建築学専攻博士課程前期、大学院生・学士（工学）

*2 神戸大学大学院工学研究科、技術職員・博士（工学）

*3 神戸大学大学院工学研究科建築学専攻、准教授・博士（工学）

Grad. Student, Dept. of architecture, Faculty of Engineering, Kobe University, B. Eng.

Technical Staff, Faculty of Engineering, Kobe University, Dr. Eng.

Assoc. Prof., Dept. of architecture, Faculty of Engineering, Kobe University, Dr. Eng.



写真1 大槌町でのワークショップの様子

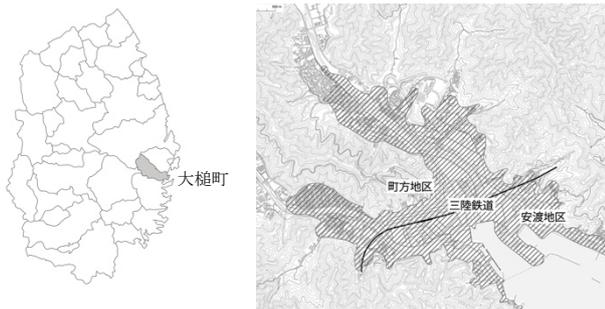


図1 大槌町における浸水被害範囲

病院、商店街といった街の中心機能が集中していた。大槌町は、震災にて甚大な被害を受け、町方地区のほとんどが津波に飲み込まれた。3,878棟の家屋と学校や病院、商店街といった街の中心機能となる施設が大きな被害を受け、機能不全となったが、特に役場などの地域の行政機能が麻痺したことで、大槌町全体の復興が遅れることとなった。その後2012年に復興整備協議会が設置され、土地区画整理事業による町方の中心市街地の嵩上げや防潮堤の建設といった様々な復興計画が行われた。その他にも大槌町文化交流センター「おしゃっち」（以下、単に「おしゃっち」）が2018年に開館し、現在は街全体の鎮魂・追悼の場となる公園をつくる「鎮魂の森整備事業」の計画が進められている。

2-2. 大槌町でのWS概要

模型WSでは、震災以前の街並みを1/500で再現し、住民との対話を通して、当時の街での生活や営みを伺い、地域の記憶を保存・継承する。大槌町でのWSは、町方地区を対象に2012年6月に1週間開催され、270人の住民が訪れた。また、2013年5月にも1週間開催し、810人の住民が訪れた。その後、安渡地区を新たに模型範囲として加え、2015年7月に再び1週間開催し、189人の住民が訪れた。模型製作範囲は、大槌川の河口を中心に漁港や山際の寺社を含めた15ピクセル（縮尺500分の1、1m×1mの模型15ピクセル）（図1）の縦1.5km、

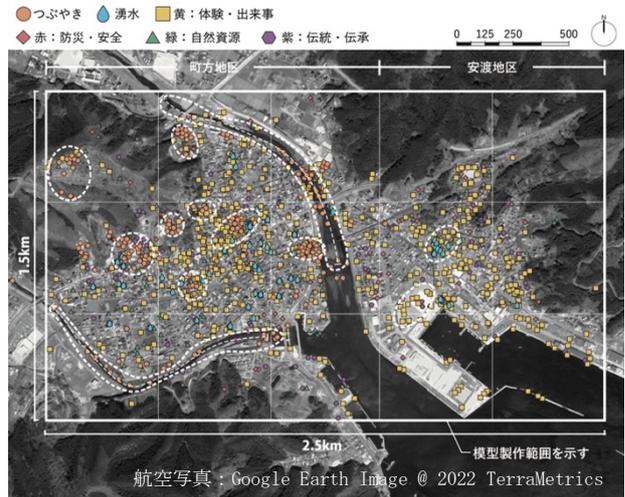


図2 記憶の旗（青以外）と「つぶやき」の分布図

表1 WSで得られた記憶の旗の本数

| カテゴリー | 旗色 | 町方 | 安渡 | 全体数 |
|--------------|----|------|-----|------|
| 名称・地名 | 青 | 1538 | 367 | 1905 |
| 体験・出来事など | 黄 | 355 | 180 | 535 |
| 防災や安全に関わる事項 | 赤 | 58 | 23 | 81 |
| 自然資源や緑に関する事項 | 緑 | 95 | 32 | 127 |
| 伝統・伝承など | 紫 | 84 | 32 | 116 |
| 自然湧水 | 水色 | 51 | 12 | 63 |
| 合計 | | 2181 | 646 | 2827 |

横2.5kmとして、街の復元模型の製作を行い、住民への聞き取りを通して、模型上に生活空間の記憶が集められた。WSで集まった住民の証言を模型上に示した「記憶の旗」は2827本（表1）で、WSにスタッフとして参加した学生が書き取った住民の「つぶやき」は611件であった。「記憶の旗」は内容（名称-青、体験・出来事など-黄、防災・安全-赤、自然資源-緑、伝統・伝承-紫、自然湧水-水色）によって分けられており、下表のような内訳となっている。地名や住居、店名などを示す青の旗が、町方地区では4分の3、安渡地区では2分の1を占め、全体では3分の2を占めているが、「のぼってきた鯉をとった」、「子どものお祭りで幼稚園で踊った」などの体験や出来事を表す黄色の旗が青の旗に次いで多い。名称を示す青の旗以外の「記憶の旗」を、模型製作範囲を示す図上にプロットしたものを図2に示す。

3. 既往研究と本研究の位置付け

これまで、生活空間や地域空間の場所性の評価に関する研究としては、川原・佐藤によるまちづくり協定策定プロセス全体を評価するアクションリサーチ¹⁾や、志村らによる景観形成における目標空間像を共有するためのイメージタイプの開発²⁾などがある。このように、今日ではまちづくりや景観形成の計画策定の場に住民や利用者の参加が重視され、参加者からの意見をどのように取り入れていくか、また計画案や対象地の諸問題の共有方

法に関して様々な取り組みやそれに関する研究がなされている。槻橋らは被災地における地域社会再生のための手法として、復元模型を用いた場所の記憶の収集方法を確立するとともに、得られた証言を整理・分類することによって地域空間の構成を分析することで、地域社会を継承していくための固有の空間的基盤の再生可能性について考察している。大槌町に関して、特に街の中心的機能が集中している町方地区において、質的な特徴を含む地域空間を、地域再生のための資源として顕在化させる方法を確立させることを試みている³⁾。本報では、町方地区に加え安渡地区に関して、寄せられた記憶の証言を整理・分類し、それらを分析することで、「個人の生活圏の記憶として語られ、地域空間の特性を表す場所」を抽出し、街全体に対して俯瞰的に考察を進めることによって、地域の心的空間秩序を再構築する。また、震災前の大槌町の地域空間と、現地でのヒアリング調査を通して明らかになった復興が進んだ現在の地域空間の状況を比較することによって、震災前後における地域空間の変容について考察を行う。

4. 集積された記憶

4-1. 町方地区

「記憶の旗」と「つぶやき」の分布図を見ると、町方地区では、多くの住民がいくつかの公共施設や自然環境に関する証言を数多く挙げていることがわかる。例えば、「御社地公園」という青色の旗が立つ場所に関しては、「鯉が住んでいた池があった」、「屋根があつて朝市が行われていた」などの出来事・体験に関する黄色の旗や、「昔は盆踊りをしていた」、「60年前水を汲んで歩いた」などの伝統・伝承に関する紫の旗、加えて「湧水にはたわしと鍋を持って洗物をしたり、大根や捌いた魚を洗っていたりする光景も見られた」などのつぶやきが場所に付随した記憶としてプロットされている。また、町方地区を囲う2つの河川に沿って連続的に「記憶の旗」や「つぶやき」が存在しており、点的な集まり方を行っている公共施設や自然環境などの場所に対して、線的に記憶が分布していることが分かる。

4-2. 安渡地区

安渡地区では、町方地区と比較して「記憶の旗」や「つぶやき」が集中して密度が高くなっている箇所が少なく、「丸嘉屋呉服店」、「佐藤理容店」などの住民が営んでいるお店や、個人の住宅といった場所に付随した記憶が、様々な場所に分散してプロットされている。しかし、青

色の旗が立つ個人の住宅に関しては、「水が豊富で洗濯をやっていた」、「井戸があつた」などの水に関連する黄色の旗がいくつか存在しており、異なる場所で同様の体験や出来事があつたことが分かる。

4-3. 記憶のクラスター化

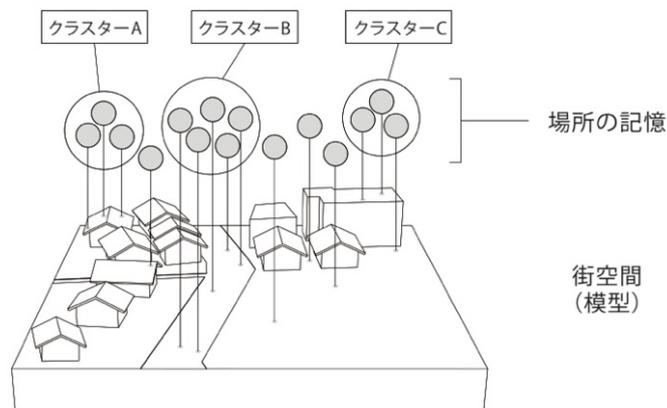


図3 クラスター化のダイアグラム

模型上にプロットされた旗を観察すると、名称や地名を示す青色の旗一つに対して、体験や出来事を示す黄色の旗やつぶやきが複数付随している状態がいくつか存在した。これらを記憶のクラスターと呼ぶこととする。WSを通して模型上に集まった記憶のクラスターを地図上に配置したものが図4であり、記憶の数に応じて分け示した。各クラスターは青色の旗に寄せられた「つぶやき」と黄色の旗の総数によって円の大きさが異なっており、大が10個以上、中が5個~9個、小が1個~4個となっている。クラスターは、大が11箇所、中が5箇所、小が86箇所で合計102箇所となった。住宅地や商業施設はクラスターが小さくなり、公共空間（寺社、教育施設、駅、公園、川）はクラスターが大きくなる傾向が見られた。

4-4. 大槌町の生活空間の特徴

大槌町において、クラスターが最大となったのは総数50個の大槌川で、「記憶の旗」が26個、「つぶやき」が公園の総数39個、小槌川、大槌駅と続き、自然環境としての要素を含む箇所が大クラスターの中でも上位を占め、次いで城山公民館、蓮乗寺、江岸寺といった施設も大クラスターを形成していることから、これらの場所が地域住民のコミュニティの場として機能していることが窺える。御社地公園、大町公園、小槌川などが大クラスターを形成しており、これらのオープンスペースに対する地域の人々の愛着の強さを感じさせる。またオープンスペースに関連して、「祭りの時は小槌川の下流を神輿が練り歩く。」「安渡橋へ続く道沿いが家なので、祭りのとき

凡例 〈記憶の旗〉(青)に寄せられたつぶやきと〈記憶の旗〉(黄)の数の合計による円の大きさの変化を以下に記す。



図4 記憶のクラスター分布図

は神輿が通る。」などの伝統行事についてのつぶやきが数多く見られたため、豊かなオープンスペースを活用しながら、多くの住民が伝統行事に参加しており、地域の文化が継承されていることが窺えた。大槌町の自然環境として特徴的な湧水に関しては、記憶のクラスターはほとんど形成されていなかった。多くの記憶が公園や学校といった公共施設に集まりクラスターを形成している一方で、湧水に関する記憶は平野部に満遍なく広がっている傾向があり、住宅や道端など、人の生活圏により近い場所に位置していることが確認できる。「湧水が出ていてその水で魚や野菜を洗っていた」といったような居住区に寄せられたつぶやきからは、湧水が地域の人々にとって日常の中の個人的な記憶として捉えられていたことがうかがえる。

5. 生活空間の変容

5章では震災前の「記憶」や「つぶやき」をもとにした記憶のクラスターと、ヒアリング調査で得られた震災後の街の様子を比較することで、大槌町における「場所」の変容について考察する。

5-1. 施設の移転

大槌町の主要施設の変化を図3に示す。震災後の復興が進む町方地区において、現状最も多くの人々を集める中心施設は「おしゃっち」であろう。「おしゃっち」はかつてのふれあいセンターや公民館、図書館の機能を集約して新しく御社地公園前に建てられた複合施設であり、地域活性化の大きな役割を担っている。震災以降、町方地区における主要機能の移転が行われたことによって、「おしゃっち」が被災した街の中心部の復興拠点としてコミュニティ形成を促す中核的存在となっている。また

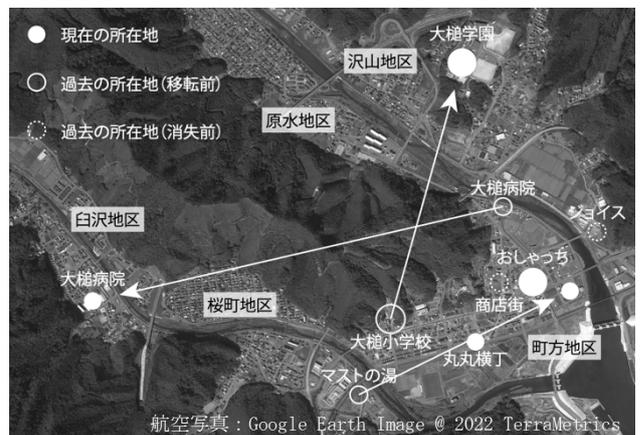


図5 主要施設の変化

| | おらが大槌夢広場 代表理事 (2022/6/27 @おしゅっち) | おらが大槌夢広場 スタッフ (2022/6/28 @おしゅっち) | 大槌町町役場 健康福祉課 介護班 班長 (2022/6/28 @大槌町町役場) |
|--------------------------------|--|--|---|
| オープンスペースについて (大町公園・御社地公園・城山公園) | 昔は自由に遊べる公園が多かったが(大町公園など)今は行政上必要だから圍っているだけの空き地になっている。今、公園と呼べるのはおしゅち公園だけ。 | 震災後からは外の遊び場が無くなった。今の子どもはみんなおしゅち(室内)で遊ぶ。学童の感覚。 | 外で遊ぶ子どもはほとんど見ない。熊がよく出るようになったので山に近付きづらくなった。城山公園は子どもだけでは行けない。 |
| 伝統行事について | コロナ前では普通にやっていた。規模は小さくなったという声もあるが、個人的にはよくここまで人が集まるなという印象。 | 規模は変わらないが練り歩き場所が寂れてしまった。何もなかったところを歩くのが寂しい。昔は地域ごとに行っていたが、震災後は合同でやるようになった。 | お盆や正月以上に人が戻ってくる。大槌を出てしまった人も大勢帰ってくる。 |
| 大槌川・小槌川について | シャケは震災後でもたくさんいたが、最近は温暖化などの影響なのか、激減している。イトヨは今もいる。 | 川に入らなくなった。震災後は水に対する警戒心が強くなった。 | シャケは震災前から徐々に減少傾向であり、震災後大きく減った。孵化場が流され機能していなかった。 |
| 湧水について | 街中では全く見なくなった。嵩上げの影響で自噴井戸は無くなったが、公営住宅前などには汲み上げ井戸がある。三陸鉄道以南の非嵩上げ対象地区には自噴水が残っていて、湧水エリアとして整備されている。 | 今は汲み上げ式のポンプがあるが、壊してはいけないと思ってしまうと触れない。子どもにも触らせないようにしている。 | 湧水は今は飲まない。規制が厳しくなった。湧水が無くなってしまったことによる変化はあまり感じない。 |
| 商業施設について | 震災以前まであった飲食店はほとんど残っていない。丸々横丁に入っている飲食店は行政援助の仮設店舗で再開している。マストの湯、みずかみ商店は街の中心に移転して再開している。 | マストの湯は盛況。寿司たつ、小川酒店、みずかみは復活した。喫茶店や飲み屋は残っていない。丸々横丁に帰ってきた店はテナントの制約があって昔のようにはやれないので店仕舞いする人もいる。 | 飲食店はあまり残っていない。復興後帰ってきた人が少ない。 |
| 公共施設について | 大槌病院は白沢地区へ移転。桜木町、白沢は昔は何もない場所だったが、今は町方よりも防災上安全ということで多くの人が入居している。 | 小学校は大槌、安渡、赤浜、北小が合併して沢山地区へ。町方の子どもは減った。 | 公民館は、併設された体育館がよく使われている。公民館として使われる人はほとんどいなくなった。 |
| 嵩上げについて | 嵩上げによって見えない壁ができ、嵩上げ地区と非嵩上げ地区の分断が生まれた。人はより内陸側へ移動した。 | 非嵩上げ地区に自宅や祖父母の家があったが、復興が進むにつれて近付かなくなってしまった。 | 嵩上げをする関係上、他の地区よりも復興に時間がかかったので、先に他の地区に人が移り住んでしまった。 |

表 2 ヒアリング調査表

40 店舗以上が存在していた「末広町商店街」は震災によって失われた。「丸丸横丁」はかつて栄えていた商店街の活気を取り戻す目的で 2019 年 12 月に駅前で作られたテナント群である。開設当初から現在まで 9 店舗が営業しているものの、仮設店舗としての金銭的・時間的制約などから以前のような経営は難しく、かつての商店街に見られた活気は失われていた。震災前に記憶のクラスターを形成していたような主要施設は、その多くが移転もしくは消失している。移転先は主に、津波被害のなかった白沢地区や沢山地区などである。町方地区の復興がかさ上げ工事などにより時間がかかったこともあり、津波被害に遭った人々は町方ではなくこれらの山側の地区に自宅を移し、結果として、かつては寂れていた山麓の方に人口・公共施設が集まり町方の人口は減少する、という人口分布の反転が生じていることが窺える。

5-2.湧水の変化

町方地区は海に近い土地でありながら豊かな湧水に恵まれ、中心市街地においても日常的に自噴井や湧水が身近なものとして生活空間に多数存在していたが、震災復興における居住区のかさ上げによってその大部分は失われることとなった。町方地区の中腹を東西に横切る三陸鉄道を境に、北側は津波対策の措置として最大で 4m 程度のかさ上げ工事が行われ、居住区として再整備された。結果として、人々の日常の中に根付いていた湧水の文化は埋没し、無くなった。すり鉢状の地形にすることでかさ上げ工事以前の高さを保った御社地公園には、市街地の中では唯一かつてのような湧水が残っている。また、

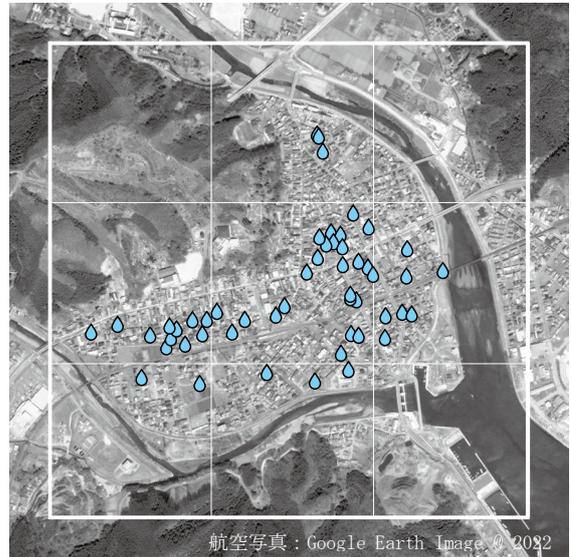


図 6 震災前の湧水に関するつづやきの分布図 (51 箇所)

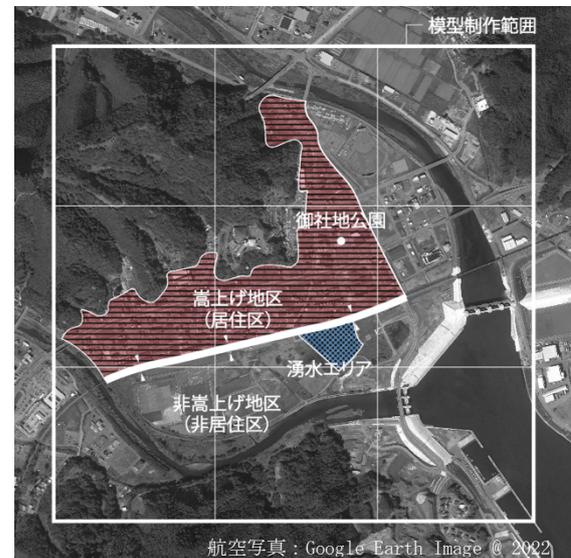


図 7 復興後の湧水分布図

一部の自噴井跡は災害時用の汲み上げ式井戸へと変化した。一方、三陸鉄道以南の非かさ上げ地区における湧水のいくつかは残存し、生態系・環境保全、市街地との共生を目的とした湧水エリアとして整備されている。しかし、かさ上げによって生まれた高低差とアクセスの悪さによって、居住区と非かさ上げ地区の間には見た目以上の距離感が生み出されており、震災以前の湧水に見られた人々の拠り所としての機能は失われている様子であった。大槌町における湧水、は震災復興を経てその数を減らすとともに、大槌の人々の生活文化に関わる機能を失い、日常とは切り離された環境資源へと姿を変えたと言えるだろう。

5-3. オープンスペース

震災前後で公園や川といったオープンスペースのあり方は大きく変容した。例えば、大クラスターの1つであった大町公園は、震災前は川沿いに位置しており、湧水や日常生活に関する記憶が集まっていることから住民たちのコミュニティ形成の場として機能していたことが読み取れる。しかし、震災後の大町公園は、名称を継承したものの、街区公園と呼ばれる町内のいくつかの空き地の1つでしかなく、ヒアリング調査を通して、現存する公園の利用についての証言はほとんど得られなかった。そのため、震災前後で大町公園の持つ役割が大きく変わってしまっているように考えられ、震災前は5つあったオープンスペースが、現状は御社地公園だけになってしまったと言える。また、震災以前の大槌川と小槌川は、子供たちの遊び場や釣りのスポット、伝統行事において神輿を担いで入る場所として、大槌町での日常生活や伝統に深く関わってきた場所であった。しかし、震災以降は住民の水に対する警戒心が強まったため、新たに堤防が建設されたことも影響し、川に近づくことがほとんど



写真2 震災後の大町公園（2022年6月28日筆者撮影）

なくなってしまったようである。このように、以前は大クラスターを形成し、地域の人々に愛着を持って利用されていたオープンスペースの多くは、現在は人の日常から切り離され、生活空間の一部とは言い難い場所になっている可能性がある。

5-4. 伝統

大槌町では、数十の団体が郷土芸能を披露し、神輿を担いで街中を練り歩くなど、街を挙げた大きな祭りが毎年3日間に渡って開かれていた。「小槌神社の神輿が大槌祭りの時には小槌川に入る。小槌の堤防には見物客が集まる。」「祭りのときは神輿の後ろを獅子舞や虎舞などが大名行列のようにつらなって町中を練り歩いていた。」のように、「つぶやき」としても多くの証言が得られており、多くの地域住民が共有する「記憶」の1つとして祭りが存在していたと考えられる。町方地区では住民の多くが他地区へと移住し人口が減少したが、祭りの日には多くの人々が帰って来るため、イベントの規模としては震災前後で大きな変化はなかったとのことであった。祭りの内容に関しては震災前後で少し変化が見られた。震災前は、3日間のうち2日間は大槌町内でも地区ごとで祭りが行われ、1日だけ御社地公園周りで行うというものであったが、震災後は多くの人々の移住や祭りの際に周る場所の減少などによって、それぞれの地区で行うことはなくなり、3日間とも合同で行っている。震災による土地形質の変化により、祭りの内容には多少の変化が生じてはいるものの、今もなおかつてのように多くの人々が集まりその規模を保っていることから、伝統行事が街の変化に適応し、震災以降も残り続けていることが窺い知れる。

6. まとめ

本稿では、大槌町町方地区での住民参加型WSで、模型上に集められた「記憶の旗」と「つぶやき」の分析から、記憶のクラスター化・構造化を行い、大槌町における生活空間の構造的特徴を明らかにするとともに、現地でのヒアリング調査で得られた現在の生活空間に関する証言をもとに、震災前後における「場所」の変容について考察を行うことを目的として進めてきた。その結果得られた心的空間秩序の変容に関する知見を以下に示すとともに今後の課題を述べる。

① 記憶のクラスター

図4に見られるように、大槌町において街の中心的役

| | 震災前（記憶の街 ws で得られた証言に基づく） | 震災復興後（ヒアリング調査に基づく） |
|----------|--|--|
| オープンスペース | 御社地公園や大町公園などの主要な公園が大きな記憶のクラスターを形成しており、多くの証言が寄せられた。 | 公園として機能しているのは新設されたおしゃち公園のみであり、その他は空き地のような状態となっている。 |
| 伝統行事 | 御社地公園を中心に街や川を練り歩く大槌祭りが行われ、多くの住民が参加していた。 | 内容に多少の変化はあるものの、街の変容に適応しながら祭りが行われている。今もなお多くの人々が集まる。 |
| 大槌川・小槌川 | 魚や貝が取れる遊び場として、子どもたちの溜まり場となっていた。 | 震災後、水への警戒心の強まりとともに人が近づくことが無くなった。 |
| 湧水 | 御社地公園などの特別な場所を除いて、ほとんどの湧水は住宅地に点在し、日常の中の個人的な記憶として捉えられていた。 | 震災復興の嵩上げにより、居住区ではおしゃち公園以外の湧水は無くなった。嵩上げのなかった非居住区には環境保全を目的とした湧水群が作られた。 |
| 商業施設 | マストの湯やジョイス、その他末広町商店街の店舗など、小～中クラスターが多数形成されていた。 | ほとんどの商業施設が姿を消した。駅前のテナント群である「丸丸横丁」による復興が試みられている。 |
| 公共施設 | 大槌病院や大槌小学校、公民館などが中・大クラスターを形成しており、多くの証言が寄せられた。 | 大槌病院や大槌小学校など、主要な施設は隣町に移転した。公民館は残っているが利用者は減少した。 |

表 3 震災前後における変化



写真 3 震災前の町方の様子⁴⁾



写真 4 現在の町方の様子（2022年6月28日筆者撮影）

割を果たしていた町方地区では、「城山公民館」や「大槌駅」、「大槌小学校」といったいくつかの施設が記憶の大クラスターを形成しており、多くの地域住民が集まるコミュニティの場がいくつか存在していたが、復興後は多くの機能やこうしたコミュニティの場としての空間が他の地区に移転、もしくは消失してしまった。

② 湧水

大槌町内各所に見られた湧水の生活利用や周辺での井戸端会議の場はかさ上げ工事によってその多くが消失した。一部残存した湧水も居住地から離れた場所にあることで、湧水の役割は日常生活を支えるものから、環境資源へと大きく変化したことが分かった。

③ オープンスペース

消失・移転したオープンスペースに替わり、震災以降いくつかの新たな街区公園が計画されたが、現時点では未整備であり、遊び場や談話の場としては人々に積極的に活用されておらず、その役割を「おしゃち」が果たしていることが分かった。

④ 伝統行事

震災以前は、伝統行事に関する記憶が数多く見られ、豊かなオープンスペースを活用しながら、多くの住民が

伝統行事に参加していたことが窺えた。震災以降は川辺に対する規制や住民の警戒心などによって、祭りの開催形態が変化し、内容に多少の変化はあるものの、復興後の街の構造形態に適応しながら継続していることが分かった。

このような心的空間秩序の変容により、未活用の湧水や未整備のままのオープンスペースなど、記憶のクラスターを形成していた場所の多くは日常に寄り添ったかつてのような性格を失った。これらは現在の大槌町においてどのような役割を果たしているのか、または果たしていくべきなのか、より詳細な現在の利用状況の調査を通して分析することを今後の課題として取り組んでいきたい。

参考文献

- 1) 川原晋, 佐藤滋: 商店街組織のまちづくりマネジメントを育むまちづくり協定策定プロセスの開発-協定策定と並行した実験的企画の実施によって生まれる「気づき」の効果-, 日本建築学会計画系論文集, 第 616 号, pp. 113-120, 2007. 6
- 2) 志村秀明, 辰巳寛太, 佐藤滋: 目標空間イメージの編集によるまちづくりにおける協議ツールの開発に関する研究-建て替えデザインゲームによる景観形成手法の開発-, 日本建築学会計画系論文集, 第 558 号, pp. 219-226, 2002. 8
- 3) 槻橋修, 山田恭平, 中村秋香, 平尾盛史: 被災地における街の記憶の復元と共有手法に関する研究-岩手県大槌町町方地区における復元模型ワークショップ-, 日本建築学会計画系論文集, 第 699 号, pp. 1129-1137, 2014. 5
- 4) 「第 8 回 OAC クリボラ/公益社団法人日本広告政策協会」
kuribora.oac.or.jp/2016.html より引用

注 1) 「記憶の街ワークショップ」(着彩-対話型ワークショップ)は、2011 年 6 月に「南気仙沼駅周辺」の白い復元模型を気仙沼市役所のロビーに展示した日から、それを見た市民の要望に応える形で始まり、以降回を重ねる毎に、方法の改善を進めてきた。東日本大震災に関わる「失われた街」模型復元プロジェクトとしては 2022 年 10 月現在で 57 ヶ所の地域を対象に活動を行ってきた。

注 2) 「記憶の街ワークショップ for 大槌町」

第 1 回、2012 年 6 月 16 日-24 日、会場：ショッピングセンター・マスト 2 階/和野っこハウス/エールサポートセンター、主催：From KOBE 大槌町復興支援ネットワーク、共催：一般社団法人おらが大槌夢広場復興館、協力：京都大学防災研究所牧研究室、カリタスジャパン大槌ベースキャンプ、ひよっこりひょうたん塾

第 2 回、2013 年 5 月 13 日-19 日、会場：城山公民館(5. 13-15)、マスト

2F(5. 16-19)、主催：「失われた街」模型復元プロジェクト実行委員会、共催：大槌町教育委員会、後援：大槌町、協力：NHK 盛岡放送局、神戸大学 槻橋研究室・近藤研究室、一般社団法人おらが大槌夢広場復興館、カリタス大槌ベースキャンプ

第 3 回、2015 年 7 月 26 日-8 月 1 日、会場：シーサイドタウンマスト(7. 26)、安渡公民館(7. 27-8. 1)、主催：「失われた街」模型復元プロジェクト実行委員会、後援：大槌町、協力：一般社団法人おらが大槌夢広場復興館、神戸大学 槻橋研究室

注 2) 実施期間 2022 年 6 月 27 日-29 日

ヒアリング対象者の概要は下記の通りである。

神谷未生氏：一般社団法人おらが大槌夢広場代表理事

五十嵐蘭氏：一般社団法人おらが大槌夢広場勤務

白澤洋喜氏：大槌町健康福祉課介護班班長